

燃えるチームアース

車椅子バスケット激しく楽しく

「ガツン」。車椅子同士が激しくぶつかる音だ。私たちは、郡山市を拠点に活動している車椅子バスケットボールの「チームアース」取材し、車椅子バスケットを体験した。体験して実際に感じたのは、車椅子同士がぶつかり合う時の衝撃の大きさとともに、その楽しさだ。

チームアースを取材、体験



選手と一緒に車椅子バスケットボールを体験した取材班

私たちは、同チームの安藤翔治主将と遠藤泰副主将の指導の下で体験。車椅子に乗り、自由に走行した後、チームアースの2人と鬼ごっこをし、シュートやゲームを行った。車椅子は、思ったより移動が速く、軽く押しただけで動いた。第一印象は危険だと思っ

バスケットとルールに違い

ダブルドリブルがないこと。車椅子バスケットと普通のバスケットの違いの一つだ。「持ち点」というルールもあり、障害の重さによって選手一人ひとり点数が違う。障害が重いほど点数は低く、軽いほど高い。そして、チームでその持ち点の合計が「14点」以下でないと試合には出場できない。しかし、違うルールばかりでは

「打ち込めるものを」「あきらめないで」

う高さでシュートを打つのは楽しい。「車椅子がほしい」と弾んでいた。何よりも、安藤主将と遠藤副主将が楽しそうにプレーしていた。私たちが車椅子

子を降る時には、車椅子が楽しいものだ、イメージが変わっていた。(山岸和矢、会田紘基 緑川真人)



車椅子バスケットへの思いを語る安藤選手(左)遠藤選手(右)

努力重ねる2人の思い

「人とのつながりを大切に。一所懸命打ちこめるものを見つけてほしい」(安藤選手)。「何かをする時に始めからあきらめないでほしい」(遠藤選手)。2人がインタビュの最後に

独自ルールに持ち点

なく同じルールもある。それは、コートやゴールの高さ、競技人数も5人で同じだ。普通の車椅子と競技用の車椅子にも違いがある。例えば普通の車椅子は、タイヤが平行になっているが、競技用の車椅子は回転性を良くする為にタイヤが8の字の形になっている。その他にも競技用のものは、スピードを出したり激しく動いても大丈夫なように作られていて、一人ひとりに合わせた形になっている。

の生活になってしまったことだ。遠藤選手も、25歳の時、交通事故で車椅子での生活になってしまったことが大きな理由だという。安藤選手は障害に対してネガティブなイメージがあったが、車椅子バスケットを始めて、「自分にもできることがある」という自信につながったそうだ。遠藤選手

も、同様のイメージを持っていたが「車椅子バスケットを始めて前向きに取り組んでいる人もいることが分かった」と話している。2人は「2020年に東京で行われるパラリンピックの選手になる」と、目標を語った。(藤本愛梨、神尾妃依、庄條はる)

「打倒仙台」 目標へ向け猛練習



「打倒仙台」を目標とするチームアースのメンバーと取材班

チームアースのライバルは、仙台のチームだという。対戦成績は良くないというが、「打倒仙台」へ日々猛練習を積んでいる。チームアースのプレイヤーは、11人で主に郡山市や二本松市の体育館で練習している。練習日は火、木、土曜日の週3回で1日の練習時間は約4時間。腕のトレーニングのため、ひたすら走り、他の人が車椅子の後ろを掴んで負荷をかけたります。最近の成績では、東北地方でわずか2チームしか出

私たちが編集しました

藤本愛梨 (西田中2年) 山岸和矢 (行健中2年) 神尾妃依 (柴宮小6年) 庄條はる (芳賀小5年) 会田紘基 (安積一小5年) 緑川真人 (大成小5年)

場できない大会に連続出場している。同チームOGで車椅子バスケットボール元選手の増子恵美さんは、2000年のシドニーパラリンピックに選手として出場。銅メダルを獲得した。